

## 1. 教育の責任

2019年度からの担当科目は（表1）の通りである。

科目名	開講年度	学期	対象学年	種別	受講者数	備考
保育原理	2019 2020	前期	1年生	講義	70名 74名	1クラス
保育内容人間関係	2019 2020	前期	1年生	演習	35/35名 36/37名	2クラス
保育内容D	2019	前期	2年生	演習	71名	2クラス※教員3名
実習指導Ⅰ	2019 2020	前期	1年生	演習	70名 74名	4クラス ※教員4名
実習指導Ⅲ	2019 2020	前期 前後期	2年生	演習	71名 69名	4クラス ※教員5名
保育入門	2019 2020	前期 後期	山村国際 高校3年	講義	17名 20名	1クラス
健康と人間関係の指導法	2019 2020	後期	1年生	演習	70名 74名	2クラス ※教員2名
子育て支援	2019 2020	後期	1年生	演習	35/35名 36/37名	2クラス
相談援助	2019	後期	2年生	演習	36/35名	2クラス
実習指導Ⅱ	2019 2020	後期	1年生	演習	70名 74名	4クラス ※教員5名
保育実習Ⅰ	2019 2020	集中	1年生	実習	70名 74名	

（表1）担当科目詳細一覧

## 2. 教育の理念

教育者となって13年が経過した。私自身が教育を学生に展開していく際に重んじている信念は2点、「自己研鑽に励み成長し続けよう」とすること、「自らのストレングスを自覚し、様々な状況を乗り

越えられる精神を持つこと」である。

自ら学び続けることについて、私は、保育者を目指す者としてだけでなく、人として生涯に渡って「知る」ことに対して魅力を感じて知識を積み続けてほしいと考えている。今後、生きていく、働いていくなかで生じる状況を回避することなく、自らの持てる知識を発揮して行動に移せるような、「学び」を前向きに捉えられるように教育を施していくことが理念にある。

また、自ら持つ力を自覚することは、自らを冷静に見つめ洞察することにもつながる。今ある状況を捉えることができれば、何を活用すればよいか、誰に相談すべきか、どのように向かっていけばよいのか、教育で得てきた知識や経験を総合的に活用できるようになる。「学び」を自らの力につなぎ、向き合える精神力が培えるように教育の中で養っていくことが理念である。

学生自身が資格や免許を取得するうえでの学びに加えて、現代の社会状況を反映する子どもや保護者、地域の子育て家庭に向き合い、健やかな育ちと最善の利益を生み出す支援を行うために学ぶことを生涯意識してほしいと考えている。

### 3. 教育の方法

#### (1) 保育内容人間関係（授業配布資料一部あり）

保育士及び幼稚園教諭養成課程で必修科目である本科目は、1年生の前期に位置付けられている。保育の内容である5領域の1つを担い、他の領域と共に、1年生の学び始めの段階において、重要な科目である。

そこで、子どもの発達に基づく自我の育ち、社会性の育ち、感情の育ちを基礎にしながら、保育者としての求められる関わり演習を交えて授業展開をした。具体的には、①ゲームを通じた人とのコミュニケーションの体験、②行事における協同での制作活動の体験、③個別での事例検討などを実践した。

その際、授業展開において留意したことは、いずれの実践も学生へ分かりやすい言葉を選ぶ、体験をする、体験後は個別で振り返る時間を設ける、教員側の学生への意図を伝えるなど、人と直接関わることを意識して学びが得られるようにしたことである。

#### (2) 保育原理（授業配布資料一部あり）

保育士養成課程では必修科目である。保育の根本原理を、保育の意義や目的、保育に関する法令及び制度、保育所保育指針における保育の基本、保育の思想と歴史的変遷、保育の現状と課題について、授業を展開した。従来であれば面接授業を行っているが、2020年度においてはオンライン授業と面接授業を併用して行った。

ワークや確認テストを授業外の復習時間に用いながら知識の定着を目指した。また、パワーポイントのスライドを印刷し、学生が適宜書き込めるようにした。レポート課題については、「今話題の保育現場探し」というテーマにし、学生の興味や関心を始点に主体的に探し学べるように工夫をした。

その際、授業展開において留意したことは、いずれの実践も学生に学びの意味を明確に伝える、法制度から得られる知識を現場の実際からよりイメージしやすい状況を作り出す、学生からのリアクションを求め考えを文字で示すなど、保育にまつわる概説を自分自身の経験に落とし込み、意識して学びが得られるようにした。

### (3) 子育て支援（授業配布資料）

保育士養成課程で必修科目である本科目は、1年生の後期に位置付けられている。保護者支援と地域の子育て家庭への支援と両面を持ち、前期の学びを経た学生が、保育・幼児教育の子ども視点から保護者に向けての視点となるよう、1年生の学びのステップにおいて、一步視野を広げていく科目となっている。

そこで、ソーシャルワークの基本的知識、概要を基礎にしながら、保育者としての求められる保護者との関わり、子どもを介した保護者との関わりを演習形式にしながら授業展開をした。具体的には、①2人組、3人組、4人組でのワークによるコミュニケーションの体験を現在実施している段階であり、今後の授業では②ロールプレイを通じた面接技法の修得と客観的観察力の醸成、③子育て支援施設の見学による観察実習、④グループワークでの事例検討などを実践する予定である。

その際、授業展開において留意したことは、いずれの実践も学生へ分かりやすい言葉を選び、自らの経験と知識が結びつくようにする、体験をした後は個別で振り返り客観的に自己の行動を振り返る時間を設ける、個人が振り返った内容を教員が各自にフィードバックするなど、人と直接関わることを意識して学びが得られるように

したことである。

#### 4. 教育の成果、評価

2019年度定期試験前に学生に対して授業アンケートを実施した。問4：総合評価、問1：学生自身の取り組み、問2：授業の内容、問3：授業方法はそれぞれ、(表2)のとおりである。単独で担当している科目は、保育原理、保育内容人間関係、子育て支援の3科目であることから、その3科目を中心に考察を進める。なお、保育原理に関しては単独で担当した2017年度の数値と比較している。

	保育原理			保育内容人間関係			子育て支援		
	2019	2017	年度差	1.2組	3.4組	クラス差	1.2組	3.4組	クラス差
問4	4.63	4.14	+0.49	4.73	4.56	0.17	4.85	4.47	0.38
問1	4.41	4.12	+0.29	4.56	4.33	0.23	4.49	4.35	0.14
問2	4.47	4.09	+0.38	4.58	4.33	0.25	4.58	4.45	0.13
問3	4.78	4.18	0.60	4.77	4.75	0.02	4.83	4.75	0.08

(表2) 2019年度の前期授業アンケートの結果一覧

##### (1) 保育原理

保育原理に関して、学生からの総合評価では「4.63」との数値が出た。2017年度は「4.12」であったため0.49ポイント上昇した。自由記述からは「授業の内容を難しかったが、事例を交えて進めてくれたので理解しやすかった。」、「声が大きくて聞き取りやすく、文字も大きいので見やすかった。」、「面白くて楽しい授業だった。」という前向きな記述もあった。保育原理の教授内容の特性上、法律や概念理解が多く、難解であることを受け、実際の事例と法律や制度の実際をつなぎ合わせて説明していったことが、学生自身の自らの経験やイメージとをつなぎあわせた学びをしていることが分かった。一方で、「私語が多い。」「座席が狭い。」など学習意欲や環境に関する意見もあった。学生一人ひとりの、本学へ入学に至るまでの学習経験や学習する姿勢によって、学習する菅谷や態度は大きく異なり、学生間で乖離は生じている。授業環境のハード面には限界があるものの、ソフト面に対する一層の工夫が必要であると考えられる。

##### (2) 保育内容人間関係

保育内容人間関係に関しては、2019年度子ども学科より始まった新設科目であるため、前年度との比較はできないが、学生からの総合評価では「4.65」という平均値が出た。自由記述からは「実体験を元に実際のお話を具体的に話されるので分かりやすかった。」、「この授業で少し事例を読み解く力が付いた気がする。」、「グループワークが多く、人間関係を実践的に学べてよかった。」という前向きな記述もあり、教員自身の経験と現在の状況を踏まえた保育の実際を伝えることができたことが学生の学びにつながったと考える。一方で「教科書を使ったかわからない。」、「プリントの返却を早くしてほしい。」という意見も見られた。本学のコンセプトである「遊んで学ぶ」を自ら体験して、保育者のイメージを醸成することにつながったが、テキストを使用する頻度は授業内の一部分のみであったため、活用していることをアピールする必要もあった。また、学生への添削が遅くなっていることは反省点である。学生自身の振り返りに対するフォローアップは、非常に大切であると考えているものの、丁寧に添削するあまり時間がかかっている。今後、デジタルツールを活用することも視野に入れ、双方向での対話を活発にして振り返りがスムーズな方法を模索していきたい。

## (2) 子育て支援

子育て支援に関しても、2019年度子ども学科より始まった新設科目であるため、前年度との比較はできないが、学生からの総合評価では「4.66」という平均値が出た。自由記述からは「実体験を元に実際のお話を具体的に話されるので分かりやすかった。」、「実際に面接技法をやってみて意識して取り組むことができた。」、「子育て広場のぼっぼに行けて、現場を見て学ぶことが多かった。」、など、前向きな記述もあり、教員自身の経験と現在の状況を踏まえた保育の実際を伝えることができたことが学生の学びにつながったと考える。一方で「教科書を使ったかわからない。」、「連絡帳の書き方が難しかった。」という意見も見られた。本学のコンセプトである「遊んで学ぶ」を自ら体験して、保育者のイメージを醸成することにつながったが、テキストを使用する頻度は授業内の一部分のみであったため、活用していることをアピールする必要もあった。今後、デジタルツールを活用することも視野に入れ、双方向での対話を活発にして振り返りがスムーズな方法を模索していきたい。

## 5. 教育の改善に向けた今後の目標

### (1) 保育原理

短期的目標	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 第一に、保育・幼児教育の関する法制度は日々改訂が行われているため、教員として動向を把握し学生にタイムリーに提示できることである。</li><li>・ 第二に、日本の保育・幼児教育に加え、海外の保育・幼児教育により関心が向くような教授内容を考えていけるよう資料の提示や視聴覚教材を準備することである。</li><li>・ 第三に、外部講師の活用を取り入れていくことである。教員として保育の根本を伝えていくことや歴史的変遷、法制度の概要を伝えていくことに加え、今を映すタイムリーな保育・幼児教育の動向について、先駆的な事例を実践している人から学べるようにしたい。</li></ul>
長期的目標	<p>保育・幼児教育の動向は日々一刻と変化を辿っているが、同時に子ども・保護者、取り巻く社会の環境も社会情勢の影響を受けながら変化をしている。保育原理は先人たちが築き上げてきた知の財産を教授することができる科目であるが、保育学としてまだまだ研究しきれていない学問の一部でもある。保育士養成の根本科目としての位置付けの重要性を認識しながらも、「研究」という視点を持ち、これから求められていく保育・幼児教育の動向を追い求めていけるよう、教育者自ら学び、研究成果を示していくことが目標である。</p>

### (2) 保育内容人間関係

短期的目標	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 第一に、人間関係を発達心理学、社会学、民俗学など多様な学問領域から把握し、学生に提示できることである。</li><li>・ 第二に、日本人の民族性や文化を大切にしながらも、多文化共生社会のなかで、多様性のある保育・幼児教育を受け止めていけるよう、関心が向くような教授内</li></ul>
-------	--

	<p>容や資料の提示、視聴覚教材を準備することである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第三に、保育現場での実際を定期的な観察実習などを活用して保育内容人間関係の理解を進めていくことである。教員として保育内容の根本や人間関係で育むものを伝えていくことに加え、子どもを実際にタイムリーに観察し、捉えたものから学びにつなげられるようにしたい。</li> <li>・ 第四に、新型コロナウイルス感染症の世界規模での流行と蔓延もあり、新しい生活様式での保育が求められ現場が試行錯誤で実践をしている。人とのかかわりが大切な時期に、新しい形で質の高い保育・幼児教育は何ができるのか、何を工夫しているのかを考えていく。</li> </ul>
<p>長期的目標</p>	<p>保育所保育指針や幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領は定期的に改定がなされている。保育・幼児教育として子どもを育むための根本的要素は変わらないものの、少しずつ社会の状況に合わせた人と人の関わりあいも求められてくる。加えて、多様性を認めていく時代にもなっていくことから、保育者として受容しながらも、何が人との関係性で大切かを自ら選びとっていくことが求められると考える。そこで、保育者としての「筋が通っている」ことを保ちながらも、「変化を受け入れる柔軟性」が持てるような学びが得られるようにすることが目標である。そのために、教育者として「保育現場」から教えられる「子ども」から教えられる視点を忘れず、教育者自ら学び、実情を捉え続けていくことが目標である。</p>

(3) 子育て支援

<p>短期的目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第一に、現在の子育て家庭を取り巻く状況を把握するため、社会学、家庭心理学、公衆衛生学など多様な学問領域から把握し、学生に提示できることである。</li> <li>・ 第二に、今の現状を的確に捉え、保護者が何に悩みや不安を抱え、どのような方法をそれに立ち向かって</li> </ul>
--------------	--

	<p>いるのかまたは周囲からのサポートを受けているのか      関心が向くような教授内容や資料の提示、視聴覚教材      を準備することである。</p> <p>・第三に、子育て支援現場での実際を観察する体験を      行い、子育て中の家庭の実際の姿に対して理解を深め      ることである。教員として保育内容の根本や人間関係      で育むものを伝えていくことに加え、子どもの実際を      タイムリーに観察し、捉えたものから学びにつなげら      れるようにしたい。</p> <p>・第四に、新型コロナウイルス感染症の世界規模での      流行と蔓延もあり、新しい生活様式での子育て支援が      求められ現場が試行錯誤で実践をしている。先の見え      ない不安な世の中で子どもを育てる保護者の不安や負      担をそのように減らし、新しい形で子育てをサポート      できるのか何ができるのか、何を工夫しているのかを      考えていく。</p>
<p>長期的目標</p>	<p>保育所保育指針や幼稚園教育要領、幼保連携型認定      こども園教育・保育要領は定期的に改定がなされてい      る。また、日本の制度においても子育て支援に対する      具体的な施策は展開され、各自治体でも嗜好を凝らした      事業が展開されている。日本の社会的文化も受け入れ      らながらも、周囲の状況が変化しつつある中でできる      支援、新しい支援の形が求められてくる。加えて、      多様性を認めていく時代にもなっていくことから、保      育者として子育ての姿を受容しながらも、「何を保護者      として育つべきか」「子育てに何が必要であるか」を自      身が洞察できる力が求められると考える。そこで、保      育者としての「筋が通っている」ことを保ちながらも、      「変化を受け入れる柔軟性」が持てるような学びが得      られるようにすることが目標である。そのために、教      育者として「保育現場」から教えられる「子どもや保      護者」から教えられる視点を忘れず、教育者自ら学び、      実情を捉え続けていくことが目標である。</p>

## 6. エビデンス一覧

( 1 ) 各科目シラバス

① 保育原理、② 保育内容人間関係、③ 子育て支援

( 2 ) 授業時配布プリント(一部)

① 保育原理、② 保育内容人間関係、③ 子育て支援

( 3 ) 試験問題

① 筆記試験 ( 保育原理、子育て支援 ) ② レポート試験 ( 保育内容人間関係 )

( 4 ) 成績集計結果 ( 保育原理、保育内容人間関係、子育て支援 )

以上